



歌謡喫茶のようす

## ボランティア活動奨励賞

住み慣れた地域で心豊かに暮らす  
居場所づくり

### 特定非営利活動法人 むー いこいの家 夢みん

横浜市戸塚区に建つ大規模中高層団地「ドリームハイツ」の高齢化に取り組み、住み慣れた地域で心豊かに暮らせることを目指す「特定非営利活動法人 いこいの家 夢みん」。

理事長の松本和子さん、運営委員代表の伊藤真知子さん、事務局長の深石晟さんからお話しを伺った。

#### 団体設立の経緯

ドリームハイツの入居は1972年(昭和47年)に始まった。当時、この地域の人口は七千人。住民自らが育んできた街であり、市民主体の地域運営のモデルといわれた街でもある。

若くして入居したほぼ同世代の住民が子育てを終え、次に親や自分自身の高齢化問題が切実になり、高齢に伴う地域のニーズも顕れてきた。地域で食事サービス、介護や家事支援も始まり、それにより満たされる人は増えた。

しかし、家族がいても孤独を感じる人、地方から呼び寄せられ地域になじめない人、寒空や道端で何時間も話しが止まらない人。そういう人を見ていて、「人とつながり、おしゃべりできる場所がほしい」「気軽に立

ち寄れる居場所が必要だね」ってことになった。そこで地域の女性が担い手になり、交流の場としてのドリームハイツの1室を賃貸し談話室(サロン)をオープンさせた。このようにして夢みんの活動は1996年(平成7年)に、高齢者が集うサロンとして始まった。

当時を振り返り、「ここは団地なので、周辺住民からの了解をとるのに大変苦労した」と語る松本さん。部屋を使うに当たっては、今も騒音など周囲に気を使う。

#### 団地の一室の購入

この団体の活動の特徴として、活動拠点である団地の一室を自分たちで購入し所有していることである。談話室(サロン)として借りた1年後には購入したのだという。

1997年(平成8年)に「夢みん」は銀行からの借入金金が六〇〇万円、地域の有志からの借入金が千五〇〇万円の計二千一〇〇万円で購入した。その後、民間助成財団からの助成金、イベント・バザーの収益を支える会からの寄附金などで銀行からの借入金を返済したり、地域の有志への返済を行い、現在の借入金の

残高は四〇〇万円に減っているという。

2000年に認証を取得し、法人格取得の結果として、介護予防型通所事業にも参入している。現在、団体の活動は談話室と介護予防の2つが軸になっており、横浜市からの資金を得ることで財政基盤の強化につながっている。

#### 多彩なボランティア

「夢みん」は全てボランティアによる運営で専従職員はいない。ボランティアもスタッフも利用者としてプログラムに参加もしている。

理事・監事は現在6名で「夢みん」の中長期的な運営に関する話し合いを行っている。運営委員は現在8名で毎日のプログラムの責任者として当番制で務めている。ボランティアは現在55名で毎日のプログラムの補佐やお茶出し、後片付けなど「夢みん」に来て働く人と、広報の配布やチラシの掲示、ケーキ作りなどをお願いしている。

2名の看護師が健康相談等に応じ、4名の講師で音楽・パソコン・健康体操などを担当しているという。

## 豊富なプログラム

団体の活動は、サロンでのおしゃべりの集いから始まった。最初のプログラムは、ミニ・デーサービースと木曜ランチであったという。食は人と人をつなげる。

プログラムの数が増えたのは、横浜市の介護予防委託がきっかけだった。男性向けのプログラムも必要だと、囲碁と将棋を追加した。土曜日には、ビデオ鑑賞会を催し、古い映画をみんなで鑑賞する。カルチャーサロンでは、月に1回、自分の体験談などを自由に話す。トーンチャイム(1人1人が音を担当して音楽を作り上げるハンドベルのような楽器)の演奏発表の機会も年1回ある。

プログラムの中で一番多いのが歌を歌うことで、「昔の歌を歌うと、昔話を花が咲く」のだという。利用者からアンケートを取って、「こんなプログラムがあるといい。」という提案を受けているという。講師はこの地域の多才な住民が担っている。

## 運営の秘訣について

「夢みん」の利用者からのアンケートで、「アットホームなところは貴重だ」「第二の家庭で、ほっとできる。」



木曜ランチのようす

「施設っぽくなくてよい。」と書いてもらえるという。

「夢みん」は住民に支えられ、住民と一緒に作っている。ボランティアの人がパソコンを習いに来たりして、スタッフやボランティアも利用者になる。「夢みん」を利用するのに手続きはいらない。このことは利用する時の精神的な負担がすごく違う。

## 多数の見学者が来訪

視察を積極的に受け入れている。毎年一〇〇人前後の見学者が「夢み

ん」を訪れる。先日も、被災された岩手県大槌町の人たちがバスを仕立てて見学に来た。これから自分たちの街づくりに参考にするといい。「高齢化について、同じ課題を抱えているので、すべてを参考にしたい。」と帰られたとのこと。日本全国各地の個人や団体、海外からも見学者が訪れている。

きたいとのこと。奨励賞の副賞は、長年実施できなかったサロンのリフォームに使いたいと考えているとのこと。  
急速に進む高齢化に向け、介護予防はますます必要で、「更に訪問看護ステーションや医療機関と連携して活動を広げられるとよいと思う。」と伊藤さんは語る。

## 今後について

団地の住居二室を拠点としているので、家庭的で居心地がよく、他団体との打ち合わせ場所としても気軽に使われている。これを継続してい

### <団体情報>

団体名： 特定非営利活動法人  
いこいの家 夢みん  
活動開始時期： 1996年4月  
理事長： 松本 和子  
正会員数： 13名  
賛助会員： (夢みんを支える会)  
200人  
ボランティア： 55人  
TEL/ FAX： 045-853-0480  
HP： [http://www.drsansan.jp/?page\\_id=22](http://www.drsansan.jp/?page_id=22)  
活動地域： 横浜市戸塚区  
活動分野： 保健、医療又は福祉の推進  
活動概要： 横浜市戸塚区俣野町・深谷町に建つ大規模中高層団地「ドリームハイツ」の高齢化に取り組み、住み慣れた地域で心豊かに暮らせることを目指す。

## ボランティア活動奨励賞

### イランの障害者支援

#### 特定非営利活動法人 イランの障害者を 支援するミントの会



パシャイ・モハメッドさん

ミントの会のパシャイ・モハメッドさんと大澤さんに話を伺った。

#### 活動のきっかけ

約10年前、パシャイさんは日本で事故に遭い、一ヶ月半の意識不明状態の後、奇跡的に一命は取り止めたが、下半身が付随になってしまった。足がもう動かないと知った時、生きてはいけないと思ったが、自分よりも症状が重い人が懸命にリハビリをしている姿に

励まされ、自分も頑張らねばと気持ちを切り替えた。

以前は何でもなかった日常の動作ですら苦勞の連続だったが、多くの支援者に支えられ、何とか新しい生活にも適応していくことができた。

そんな時、パシャイさんはふと、祖国イランで暮らす障がい者達はどうしているのだろうか考えた。イランの家族から自分と同じ脊髄損傷の男性を紹介されたが、その人はベッドで寝たきりの状態であった。

この人のために何かできることはないかと考え、車椅子を送ることにした。外出できるようになった男性は、健康面でも精神面でも劇的に改善した。男性本人だけでなく家族まで明るさを取り戻した。これが、その後の活動の始まりだった。

この経験を機に、もつと多くのイランの障がい者に支援を広げたいと考え、秦野のNPO団体と連携し、不要になった車椅子を集め、イランに送り始めた。イランではまだ少ない子ども用の車椅子は特に喜ばれた。団体の活動はイランでも評判になり、車椅子の希望者は急増し、このままでは任意団体としてでは対応できないと考え、NPO法人ミントの会を立ち上げた。

団体名にある「ミント」は、イランではハーブとしてだけでなく、薬としてなど様々な用途で使われている。しかもミントは生命力が強く広がりやすい。支援の輪が広がり、地域に根付き、多くの人の役に立つことを願い、団体名に「ミント」を入れた。

#### 心のケアと障がいに対する啓発活動

ある時、自殺未遂を繰り返す障がい者の両親から相談を受けた。パシャイさんは急いで男性を訪問し、命の大切さについて語ったが、男性は当初人前に出るのも恥ずかしいと引きこもっていた。「少しずつ頑張りましょう。」と男性を根気強く励ました結果、男性は外出するようになり、徐々に自信と明るさを取り戻し、現在は仕事も見つけ元気に働いている。

こうした経験を通し、やはり、車椅子などの物的支援だけではなく、心のケアも大事だという思いを深めた。自暴自棄になっている障がい者に命を大事にし、自尊の気持ちを持って欲しかった。

障がい者が自信を失っている大きな理由として、情報の不足があった。自分自身の体の情報、生活方法の情報、自らの権利についての情報等。イラン

では障がい者のための情報が日本より圧倒的に不足している。

そこで、ペルシャ語に翻訳した日本の脊損ケア手帳と障がい者の排せつ・床ずれ予防のガイドブックを現地で各二千部発行した。また、神奈川リハビリテーション病院の協力の下、けい椎損傷の人の動画を撮り、車椅子の使用法の他、一日の生活で何ができるか、何をすべきかをペルシャ語の解説で示して、それをイランに送った(620本)。

さらに、イランでセミナーを毎年開催し、障がいについての知識、日本の介護制度やバリアフリーについて紹介している。看護師にも同行してもらい、講演やリハビリ指導もしてもらった。参加者はセミナーで得た情報に対し驚くと同時に将来の生活に希望を持ってくれる。参加者からは「生活が大きく変わった。自分の体をもっと大事にしたい。」など喜びの電話やメールが後を絶たない。

#### イランの街のバリアフリー化

イランの街のバリアフリー化にも取り組んでいる。日本では、障がい者が外出しやすい環境づくりが進んでいるが、イランではまだそうした制度や施設・機材の普及は進んでいない。障



アイマスク体験

イランの役所に掛け合い、現地の福祉スタッフと協力して課題の解決に取り組んだ。日本の福祉制度や建築技術に関する関心は高い。日本人福祉スタッフや建築士にもイランへ同行してもらい、スロープの設置方法や点字ブロックの設置について講義してもらった。ワークショップでは、現地の工事関係者に車椅子体験やアイマスク体験をしてもらうなどして、障がい者の視点に立った施設建設の重要性を訴えた。最近では、イランの州福祉省から、バリ



車イス体験

がい者がエレベーターのない高層住宅に住んでいるケースも珍しくない。

アフリーに関する研修依頼もくるようになった。

### 奨励賞応募の理由

奨励賞に応募した理由について、「私たちの活動は、多くの支援者に支えられている。活動が意義のあるものであることを確認し、支援してくれる人に喜んで欲しかったから。」と話してくれた。受賞の反響は大きく、在日イラン大使館も奨励賞受賞を知っていた。街に出かけると、「県に表彰された人ですよね？」と声をかけられる。奨励賞の受賞後、募金や車椅子の提供、手伝いの申し出も増えたという。

### 活動成功の秘訣

「ネットワークを大事にしたことが大きい。他の障害者支援団体や当事者団体、医療機関との連携。団体だけでは対処できなかった問題にもネットワークのお陰で対処できた。イランまで行ってくれる専門家も、他団体から紹介していただいた。人や機関の紹介、ノウハウの提供など様々な形で支援していただいた。」と大澤さんは語る。パシヤイさんも「周りの人の助けがあったからできた。そうでなければ私には何もできなかった。」と謙遜するが、既

にある各地のネットワークにうまくつながる努力を惜しまなかったこと、人と人とのつながりを何よりも大事にしたことが、活動成功の秘訣であろう。

### 日本社会への期待

イランではキャハリザクという障がい者や高齢者、病人のための施設がある。運営は全て寄付金で賄われ、そこで働く人々の多くはボランティアである。宗教的な理由もあるのかもしれないが、日本よりも寄付文化・奉仕文化がはるかに進んでいるという。イランでは、至るところに寄付のためのポストが置かれている。子どもたちは小さい頃から、奉仕の大切さについて繰り返し教わり、そうした考えは、イラン国民の心に深く根ざし、寄付・奉仕の文化となっている。

パシヤイさんから見ると、日本は福祉制度が発達し、また国民の道徳意識も高いが、まだまだ寄付・奉仕文化は育っていないと感じている。今後の日本の寄付文化・奉仕文化の成熟を期待しているという。

### 今後の展望

近い将来、イランにミントの会の支部を作り、障がい者の支援を更に強化するとともに、国民の相互交流を促進し、両国の友好関係を深めていきたいと考えている。

インタビュ어의最後にパシヤイさんは、「自分は神奈川県が好きだ。こだわりのある。今後も神奈川県発でもっともっと大きな活動をしていきたい」と力強く語ってくれた。

### <団体情報>

団体名：特定非営利活動法人  
イランの障害者を支援する  
ミントの会  
活動開始時期：平成18年4月  
代表者：パシヤイ モハメッド  
会員数：約30名  
TEL：080-3496-3423  
FAX：0463-79-5755  
Mail：mint\_assist@yahoo.co.jp  
HP：http://www.mint-assist.com/  
活動地域：神奈川県内、イラン  
活動分野：保健、医療又は福祉の  
増進  
活動概要：イランの障がい者に対し車いすなどの福祉機器の提供  
やリハビリの研修を行うなどの  
自立支援を行うとともに、日本と  
イランの文化交流を行っている。

## ボランティア活動奨励賞

### 知的障害などの発達障害に対する 理解啓発活動

#### 瀬谷区知的障害理解啓発グループ アントママ ant mama



アントママの代表 八木澤恵奈さん

瀬谷区知的障害理解啓発グループ  
ant mama (アントママ) は、子どもの  
発達障害や自閉症を分かりやすく地域

で伝える活動を行い、実績を重ねている。小学校で出前授業を終えた八木澤代表に話をお聞きした。

#### 活動のきっかけ

八木澤さんの息子さんを通う学校で、息子さんの障がいについて話す機会を得たことが活動のきっかけだったという。当時、息子さんは個別支援学級で学ぶ六年生。普通級の子どもたちとの交流は、体育や道徳など学年が上がるに従い限られていく。八木澤さんは、息子さんの得意なところ、苦手なところをありのままに同級生に話したという。

話を終えて、一人一人の小学生から感想をもらった。「そうだったのか」「なぜが解けた」と、すんなりと受け入れられた。「もつと早く聞いておけばよかったのに」との感想もあった。このときの反響の大きさに、子どもの発達障がいや自閉症を皆に伝える意義を感じたという。これをきっかけに、学校や公共施設で講演をするようになった。そして、平成23年に7名のメンバーと一緒に「瀬谷区知的障害理解啓発グループ」を立ち上げ、本格的に活動を始めた。子どもの障がいを「あり（ant）のまま」を伝えたいの思いから、グループの名を「アントママ」としたという。

当初、子どもたちの前で「障害」という言葉を控えるよう学校から言われたり、障がいがある子の親から協力をしてもらえなかったりしたときには活動の難しさを感じたという。健常児やその親に、障がいを理解させるのは無理と思う親も多いが、そんな時に、力になってくれたのは仲間だったという。

#### 障害をつたえる活動

アントママの合言葉は「みんな違って当たり前」。障がいのある子は、学校内で特別扱いをされる存在。知的障がいや自閉症の人の気持ちや感覚を子どもたちに伝えることは、「いじめ防止」にもつながる。アントママでは、言葉が伝わらない「もどかしさ」を着ぐるみの人形劇で表したり、周囲の喧騒を録音し、それが増幅して聞こえる体験をさせたりと、障がいによる感覚を伝える工夫を重ねている。

アントママの活動は、今、瀬谷区内の小中学校や高等学校に受け入れられている。一人の母親から始まった活動が地域で受け入れられ、その支持者が広がっている。今回のボランティア活動奨励賞への応募も、地域の子育て団体からの推薦であった。

#### 子育てのピア相談の活動

アントママは、子育てに悩む母親のサポートにも取り組んでいる。瀬谷区子育て支援拠点「こてらす」で週一回、子ども達の発達遅れを心配する母親や家族の相談のピアサポートを続けている。ピアサポートとは、同じ境遇の仲間（Peer）同士の相談支援のこと。子ども達の発達遅れを相談するため、公



中学での啓発活動のようす

的な機関に相談に向くのはハードルが高いと感じる親は多い。不安を抱えた微妙な母親の気持ちに寄り添い、問題を共有しながら成長を見守ることができるとの相談は、今後も続けていきたい活動だという。



障がいのある子どもが避難所での辛さの寸劇で伝える

### 活動のひろがり

アントママには講座や研修会の依頼が地域から集まっている。学校だけでなく、町内会や自治会、PTA、法務局や更生保護会、市職員向けの研修会など、子育て中のママがメンバーであるアントママにとって家事・子育てとの両立は大変だ。

啓発の際、依頼先のニーズに沿った内容に作り変え工夫をしながら伝えている。お金を出して聞きたいと毎年同じ団体から講演依頼をいただくことも多くなった。

障がいのある子どもが避難所で過

すことの辛さ、難しさを行政に伝えている。東日本大震災では障がい者にも多くの犠牲者が出た。障がい者側の防災意識を高めるとともに、障がい者が地域防災に参画することは重要だと考えている。

### 映画祭でサポーターを獲得

平成25年の年末、この奨励賞の副賞を使い、アントママ主催の映画会が開催された。上映された映画は『39（サンキュー）窃盗団』という障がい者が主演の映画。「障がい者が罪に問われない」と言われて、障がいがある兄弟が泥棒の旅に出るというコメディータッチの内容である。障がい者が直面する状況と生き方を丸ごと考えさせられる作品だ。

八木澤さんは挨拶の中で、アントママの活動をそのまま凝縮した作品だと語る。

### 今後の展望

マイノリティ（少数派）の人権保護や福祉増進に必要な活動である。さらに、すべての人に住みやすい地域とするために不可欠の活動だと団体のメンバーは考えている。

メンバーの皆さんは子育てをしながら

### <団体情報>

団体名：瀬谷区知的障害理解啓発グループ アントママ ant mama

活動開始時期：平成19年11月

代表者：八木澤 恵奈

会員数：7名

TEL：045-302-6962

FAX：045-302-6962

活動地域：横浜市内

活動分野：保健、医療又は福祉の増進

活動概要：知的障がいや発達障がいの人の独特のとらえ方や聞こえ方の疑似体験を通じた理解促進のための研修を行っている。また、子育て支援拠点におけるピア相談、障がい児家族の避難場所体験活動を実施している。



瀬谷公会堂のホール満席の支援者の皆さん

らの活動ではあるが、皆、若い力でま

を図りながら、活動をもっと大きく広げていきたいとの抱負を語っていた。



映画「39 窃盗団」の監督・主演者と団体スタッフ



CPサッカーの魅力を語る神さん

## ボランティア活動奨励賞

### CPサッカー（脳性まひ者7人制サッカー）の普及と発展の活動

じん ゆきお  
神 幸雄

上げ、日本脳性麻痺<sup>まひ</sup>7人制サッカー協会の設立に尽力した神さんに、これまででの活動と今後の目標について伺った。

#### 活動のきっかけ

CPサッカーは、パラリンピックの正式種目競技で、対象は脳性まひ者のほか、脳血管障害などの後天的な障がいを含んでいる。立った状態で行う障がい者スポーツの中で、唯一の団体競技だ。

神さんには、出産時の後遺症で四肢まひがあるが、子どもの頃からスポーツに親しんできた。中学ではハンドボールを始め、社会人になってからは水泳や陸上を続け、全国大会で優秀な成績を修めてきた。

CPサッカーを知るきっかけは、平成8年（1996年）のアトランタ・パラリンピックだという。当時の日本では、この種目は知られていなかった。神さんは雑誌でこの種目を知り、「何よりチームスポーツがやりたかった。」と振り返る。

#### CPサッカーとは

平成24年（2012年）の全国障害者スポーツ大会でも、CPサッ

カーはオープン競技に採用され、2020年の東京パラリンピックの競技種目として実施が予定されている。現在、CPサッカーの国内チームは、神さんのエスペランサを含め神奈川県内に2チーム、全国で6チームが活躍している。

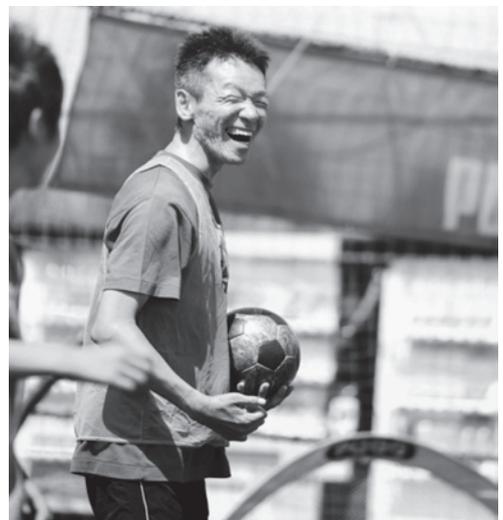
ルールは、国際サッカー連盟（FIFA）が定めたサッカーのルールを基本に、一部修正がなされている。最大の特徴

は、1チームは7人のプレーヤーで構成され、自力で走ることが求められ、両下肢や四肢に障がいがある選手が常に出場しなければならない。

#### 夢を形にするために

「仲間との一体感によって、自分のイメージ通りのプレーができたときの快感は、何にも変えられない。」とCPサッカーの魅力を語る神さん。

「CPサッカーでラリンピックに出場したい。」と、仲間と準備を重ねて、平成9年（1997年）にチームを発足させた。当時はルールもよく分らず、CPサッカーの先進国・



サッカーをともに楽しむ神さん

韓国に学びに行くこともあったという。平成13年（2001年）には、この活動を全国に広げるために、JCPFAというCPサッカーの協会を立ち上げた。

神さんは、平成17年（2005年）にアメリカの国際大会（CPサッカーワールドカップ）に出場し、現役を引退した。選手時代の経験や世界のCPサッカーを観てきたことを生かし、CPサッカー選手出身の指導者に。平成21年〜23年（2009年〜2011年）には日本代表チームの監督としてパラリンピックの予選大会となる国際大会に出場した。

## パラリンピック出場が目標

日本はまだ、この種目でパラリンピックに出場したことがない。

2012年のロンドンパラリンピックでは、世界ランキング上位16か国の中から、ホスト国を含め8か国に出場権が与えられた。

パラリンピックに出場するためには、予選大会となる国際試合に出場し、世界ランキングの上位に入らなければならぬ。パラリンピックの出場枠は8か国だが、現在、日本の世界ランキングは14位だという。そこには、世界の高い壁が立ちふさがっている。この壁を乗り越え、パラリンピック初出場を果たすことが、日本代表チームの目標なのだ。

## ジュニアの育成

エスペランサでは、国内で唯一ジュニアの養成を行っている。障がいがある子どもたちに、スポーツを楽しめる環境を提供したいと、ジュニアのカテゴリーを作った。子どものうちから始めれば、技術の向上は速い。現在、ジュニアを合わせ約60名のクラブ員がいる。

エスペランサでは、一般が週1回、



ジュニアを指導する神さん

ジュニアが月2回の練習会を基本としている。肢体不自由児者を対象としたサッカー教室やCPサッカー選手の発掘・育成強化を行っている。

## これからの活動

今回、韓国のCPサッカークラブと協定を結び、CPサッカーによる日韓交流をスタートさせた。奨励賞の副賞は、韓国との選手交流の経費に使いたいと考えている。

そもそもクラブの運営には、会場借上費や遠征費など、ばく大なお金がかかる。障がい者スポーツの分野への民間の助成金や企業の協賛金は極めて少ない。選手やスタッフは他に仕事を持ち、限られた時間の中で、活動時間を確保している。エス

### <受賞者情報>

受賞者名：神 幸雄 (個人)

活動開始時期：平成9年4月

活動地域：横浜市、川崎市

活動分野：

学術、文化、芸術又はスポーツの振興

活動概要：

日本で初めてパラリンピック正式種目であるCPサッカーのチームを立ち上げ、自ら選手として活躍するだけでなく、「日本脳性麻痺7人制サッカー協会」の設立にかかわり、日本代表監督に就任するなど、指導者としても活動し、CPサッカーの普及・発展に努めている。

(以下、「特定非営利活動法人CPサッカー&ライフ エスペランサ」の連絡先等)

TEL：050-3305-0177

FAX：044-330-1419

HP：<http://npo-esperanza.org/>

所在地：川崎市中原区上小田中3-4-8-202

ペランサは、地域の人々に支えられている。「身近な応援をもっと増やす努力が必要だ。」と今後の運営についても語る。

活動の難しさとやりがいについて、「勝つチームをつくることと、普及を目的とした活動では方向性が一致しない。そのバランスを取りながら、今後もCPサッカーを進めることで、障がい者の自立と社会参加を進めていきたい。」と、語っていた。

「サッカーを始めて、自分に自信が持てるようになった。」という選手たちの声が、この活動の有意義さを物語っている。



サッカークラブ「エスペランサ」の皆さん



メンバー同士の打合せの様子

## ボランティア活動奨励賞

誤食を防止するための  
食物アレルギーサインプレートを普及

特定非営利活動法人

エーエル  
ALサインプロジェクト

特定非営利活動法人ALサインプロジェクトは、保護者の目が届きにくい外出先などで、子どもの目線で食物アレルギーサインプレート(以下、サインプレート)による誤食事故防止の啓発を続けている。代表の服部佳苗さんと、サインプレートの発案者の林秀治さんに話を伺った。

### 活動のきっかけ

服部さんの息子さんは、アナフィラキシーショックを引き起こす重度の食物アレルギーであった。息子さんは幼稚園当時、お菓子交換がある遠足に参加することができなかった。何とか遠足に参加させたいとの思いから、この活動が始まったという。

幼稚園のお友だちのお父さんであった林さんが、そのことを知り、誰もが見てわかるデザインを描いてくれたのが、サインプレートの始まりだった。サインプレートは食物アレルギーのことを伝えることができない乳幼児に代わり、周囲の人に、食べられない食品を伝えるもの。林さんはデザインの専門家で、職業スキルを生かしたボランティア(プロボノ)である。



台紙プレートに貼った状態のALサイン

### 子ども同士でも守られる

しかし、活動が始まった2007年当時は、食物アレルギーのことはあまり一般には知られておらず、患者間の受け止め方も今とは大分違ったという。自分から食物アレルギーだと知らせ、食べられない食品を伝えることに不安を覚える人もいたという。しかしわかりやすく伝えることで得られた周囲の協力は暖かいものだった。なかなか切り出しにくい初対面同士の中でも、サ

インプレートを付けることで食物アレルギーに気づいてもらえ、親同士のコミュニケーションや解りあえるきっかけにもなる。子ども同士で「これ、食べられる?」と子どもが守られていることを実感できるという。

サインプレートは、卵、乳製品、大豆といった、食物アレルギー特定品目26種類のから、子どもが食べられない4品目以下の食品デザインを台紙に貼り表示する。これを食事が出る行事や友だちと遊ぶときなどに、衣服やカバンなどにつける。



服にALサインをつけたお子さん

### 医療関係者とのネットワーク

サインプレートに貼れる食品が4品目では少ないと思う方もいるかも知れない。これは、必要のない食品の除去まで、子どもに無理強いさせることがないようとの考えによる。診療ガイ

複数項目プレート用 26品目 (アレルギー コマー一覧)



食物アレルギーを引き起こす 26 品目のアイテム

ドラインに沿った正しい診断のもと、食物経口負荷試験を通して見極めていくと4品目以下に収まる場合が多いという。これは専門医の見解に合致している。「正しい診断に基づいた必要最小限の原因食物の除去」という啓発も、サインプレート普及の重要な目的である。従って、必ず医療機関から渡すこともルールにしている。

今、サインプレートを配布している病院は全国に約二〇〇か所以上。これも服部さんらの地道な働きかけによって実現したものだ。

**神奈川県内の配布病院**

(国立病院機構) 神奈川病院

小児科アレルギー科

(〃) 相模原病院

(〃) 横浜医療センター小児科

県立子ども医療センターアレルギー科

済生会横浜南部病院小児科

藤沢市民病院こども診療センター

大和市立病院

横浜市立みなと赤十字病院

アレルギーセンター

**奨励賞を受賞して**

これまでも、小児アレルギー学会で発表し協力を求めてきた。神奈川県にも応援してもらったおかげで、学会でサインプレートの紹介ブースを出せるなど、医療関係者からの信頼は厚い。こういったネットワークを築きながら、団体メンバーのスキルを向上させている。

平成25年6月に茨城県で開かれた日本小児難治喘息・アレルギー疾病学

**<団体情報>**

団体名：特定非営利活動法人  
ALサインプロジェクト  
(平成25年10月法人格を取得)

活動開始時期：平成19年5月

代表者：服部 佳苗

会員数：10名

HP：http://alsign.org/

活動地域：藤沢市内

活動分野：保健、医療又は福祉の増進

活動概要：自分で食物アレルギーを伝えられない子どもの誤食を防ぐため、子ども同士でもわかりあえる「食物アレルギーサインプレート」や、緊急時の対応も記載した「食物アレルギー緊急時カード」を制作し、医療機関を通じ無償配布している。

会に参加し発表をしている。そのための費用に奨励賞副賞をあてたという。サインプレートの利用はまだ少ない。これからも、食物アレルギーの患者さんや医師・医療機関への普及、そして一般の方への啓発を続けていきたいと語る服部さんであった。

**東日本の震災を踏まえて**

大震災当時、サインプレートが避難所では小さく見えにくかったとの意見が寄せられた。そこで震災経験者の声をもとに「食物アレルギー児災害時ビブス(写真下)」を作成し販売している。また、読み書きができる小学生同士



災害時用のビブスを着る子どもたち

が、いざという時に備え、助けになるよう食物アレルギー緊急時カードや補助教材「れんしゅう帳」を発行して、食物アレルギーの自覚と理解を深める取り組みも行っている。つけて伝えるサインプレートから始まった誤食防止のツールを次々に世に送りだしている。